

P5 過去から学ぶ災害対策

Disaster countermeasures learned from past monuments.

○木村一成 ((株)ナイバ)

1. はじめに

新元号「令和」が幕を開けた。「平成」の時代は災害の時代とも言われ、約 30 年の間に数多くの大災害を経験してきたというイメージがある。しかし、日本は沈み込む海洋プレート境界部に位置していることから、平成の時代だけではなく昔からいろいろな災害を繰り返し経験してきたはずである。長い年月の間に災害は繰り返し発生するものの、私たちが直接的に知り得る災害の情報は人間が活着している間に取得できる情報であり、数 10 年に 1 度発生する土砂災害や地震災害など、発生間隔が 100 年程度までのものが主体である。私たちの記憶に新しい東日本大地震のように莫大なエネルギーを発散する巨大災害の発生周期は 1000 年に 1 度程度と言われており、活着している間にたまたま遭遇することはあり得ても、同じ人間が 2 回経験することはありえない。

過去の災害経験を学ぶ上で最近注目を集めているのが、過去に起こった災害について記された石碑などの『自然災害伝承碑』である。例えば、平成 30 年 7 月豪雨で多くの犠牲者を出した地区には 100 年以上前に発生した水害を伝える石碑があったものの、石碑の内容について関心が持たれておらず、有効利用されていなかったことが災害後に話題となった。また、最近、国土地理院の地理院地図上に自然災害伝承碑の掲載が始まったことでも脚光を浴び始めた。

自然災害伝承碑には数百年前の災害について記されたものもあり、石碑に記された内容を読み解くことで当時の被災した様子を伺い知ることができる。これは、当時の人々が経験した恐怖体験の伝承であり、後世の私たちへの教訓である。

近年、災害の巨大化が顕在化してきているが、今後我が国は少子高齢化を迎え財政的にも厳しい状況を迎える中、ハード対策を主体とした防災対策は限界を迎えつつある。これを受けて、ハザードマップの作成や避難訓練などのソフト対策の重要性が高まってきている。今回紹介する自然災害伝承碑は、巨大災害が発生した被災箇所に建てられていることが多く、当時の被災状況を伝えるとともに地域に住む人々への防災意識の向上に寄与するものと考えられ、今後のソフト対策の一翼を担うことが期待される。

今回はこのような背景のもとに、自然災害伝承碑について紹介する。

2. 自然災害伝承碑について

国土地理院は自然災害伝承碑について「過去に発生した津波、洪水、火山災害、土砂災害等の自然災害に係る事柄（災害の様相や被害の状況など）が記載されている石碑やモニュメント。」としている。国土地理院ではこれまでは「記念碑」として一括してきたものを

新たな地図記号を設けて「自然災害伝承碑」として地図に掲載している。

なお、国土地理院の地理院地図には2019年10月16日現在で42都道府県109市町村の328基の自然災害伝承碑が掲載されている。この中で中国地方では広島県25基、島根県4基、山口県4基、岡山県3基、鳥取県2基の合計38基が掲載され、四国地方では、徳島県18基、高知県14基、愛媛県2基の合計34基が掲載されている。

なお、現在地理院地図に登録されている伝承碑を見ると地震・津波、台風、洪水に関するものが多く、土砂災害は少ない。その他には、火山災害、地すべり、ため池決壊に関する伝承碑もある。

伝承碑が示す自然災害としては、記憶に新しいものでは東日本大震災（2011年）、平成26年広島豪雨災害（2014年）、平成26年御嶽山噴火（2014年）などがあり、逆に古いものでは宝永地震（1707年）や慶長会津地震（1611年）などがある。2019年10月16日更新分までに地理院地図に登録されている中で最も古い伝承碑は、島根県益田市にある1026年の津波災害の石碑である。

表－1 地理院地図に掲載済みの自然災害伝承碑¹⁾（2019年10月16日現在）

市町村名		伝承碑数	伝承されている災害	写真の二次利用について (空欄は国土地理院コンテンツ利用規約)	掲載日
鳥取県	鳥取市	2	洪水(1795)、土砂災害(1893)		2019.9.1
島根県	浜田市	2	浜田地震(1872)、昭和58年7月豪雨(1983)		2019.10.16
	益田市	2	津波(1026)、昭和58年7月豪雨(1983)		2019.7.12
岡山県	倉敷市	2	明治26年大洪水(1893)、 昭和51年台風17号による浸水(1976)		2019.6.19
	鏡野町	1	明治25、26年の吉井川の水害(1892,1893)		2019.6.19
広島県	広島市	20	明治40年豪雨(1907)、大正15年豪雨(1926)、 昭和26年ルース台風(1951)	平成26年広島土石流災害(2014)など 広島市に問い合わせ (広島市危機管理室危機管理課082-504-2653)	2019.6.19
	庄原市	3	洪水(1970)、洪水・土石流(1997)、 平成22年庄原豪雨災害(2010)		2019.10.16
	坂町	2	明治40年豪雨(1907)		2019.6.19
山口県	山口市	4	大正14年9月1日の豪雨(1925)、周防灘台風(1942)		2019.9.1
中国地方 合計		38			
徳島県	小松島市	3	安政南海地震(1854)、昭和南海地震(1946)		2019.7.31
	阿南市	5	安政南海地震(1854)、昭和南海地震(1946)		2019.9.1
	美馬市	3	昭和50年台風6号(1975)、昭和51年台風17号(1976)		2019.9.1
	牟岐町	6	安政南海地震(1854)、昭和南海地震(1946)		2019.6.19
	松茂町	1	安政南海地震(1854)		2019.6.19
愛媛県	松山市	1	明治19年洪水(1886)		2019.9.20
	大洲市	1	土砂災害(1886)		2019.7.31
高知県	高知市	7	安政南海地震(1854)、大正14年水害(1925)、 昭和南海地震(1946)、昭和47年比島山災害(1972)、 昭和51年台風17号(1976)、平成10年豪雨(1998)		2019.7.31
	土佐市	6	安政南海地震(1854)、昭和南海地震(1946)、 昭和50年台風5号(1975)		2019.9.1
	大月町	1	高知県西南部豪雨(2001)		2019.10.16
四国地方 合計		34			

現時点での自然災害伝承碑の問題点の一つとしては、明治・大正期に設置されたものは漢文などで記されており、今の人々が一見して内容を把握することが難しいことが挙げられる。現代語訳のついでに伝承碑もあるとのことであるが、その数はまだ少なく、その整備と内容の伝承が今後の課題と考えられる。

3. 自然災害伝承碑の例

ここで、中国四国地方における自然災害伝承碑の例をいくつか紹介する。

(1) 広島県（水害・土砂災害）

最近、広島県はたびたび大規模な土石流災害に見舞われ、多くの犠牲者など甚大な被害が発生している。小山ほか（2017）²⁾によると、広島県内には40基の水害碑があるとされている。これは現在掲載されている地理院地図のデータ（25基）よりも多い。広島県の伝承碑の特徴として、水害（土砂災害）に関する石碑が多いことが挙げられ、これは災害発生地域の地域特性を反映している。また、小山ほか（2017）では、伝承碑の設置位置は災害発生や川沿いであることが多いことが指摘されている。これは防災上重要な情報であり、過去の災害発生位置を知ることで、今後の防災計画に生かせる可能性がある。

(2) 徳島県（洪水）

徳島市を流れる吉野川は「四国三郎」と呼ばれる日本三大暴れ川の一つとして知られており、多雨地域である上流域への降雨時には、下流域では洪水が頻発していた。この下流域では「高地蔵（たかじぞう）」と呼ばれる台座の高いお地蔵さんが堤防の近くに数多く見られる。この高地蔵のうち、最も背の高いものは台座の高さが約3m、全体の高さは約4.2mのものがあり、手を合わせる人々を上から見下ろすような姿から「うつむき地蔵」と呼ばれて親しまれている。これらの高地蔵を詳しく調べると、江戸時代の1740~1780年、1830~1860年に数多く作られたことがわかっており、おそらく大洪水の発生後に集中的に作られていたことが伺える³⁾。また、台座の高さは地域によって変化があり、これはその地域で発生した洪水の規模を反映しているものと思われる。つまり、現在でいうハザードマップとしての意味合いを持っており、当時の防災上重要な役割を果たしていたものと考えられる。



写真-1 うつむき地蔵（徳島市国府町）
（徳島市ホームページより⁴⁾）

(3) 高知県（地震・津波）

今後発生が懸念される巨大災害の一つに南海トラフ地震がある。現時点での最大想定では、太平洋に面する高知県の沿岸部には地震後 10 分以内に 10m 以上の津波が押し寄せると言われている。南海地震は今後 30 年以内の発生確率が 70～80%とされており、地震への対策が進められている。南海トラフ地震は 90～150 年の周期で発生するといわれており、東南海地震との連動型の場合には、高知県のみならず西日本の太平洋側を中心に広範囲に甚大な被害を与えてきた。このような歴史を示すように、高知県内の沿岸部には地震・津波に関する石碑が数多く残されている。

高知県内ではこのような地震に関する石碑のうち、1854 年に発生した安政南海地震に関する石碑が数多く残っており、高知大学などによる「災害記念碑デジタルアーカイブマップ」⁵⁾によると同地震だけで 14 基の石碑があることが示されている。これは安政南海地震の被害が大規模であったことを示しており、今後起こりうる南海トラフ地震への備えを考える際にも大いに参考にするべき情報であると言える。

4. 今後の展望

今回、防災対策のソフト対策に利用できるひとつの例として自然災害伝承碑を紹介した。現在、国土地理院でその情報を収集して公開する試みが始められたところであるが、まだその数は少なく、今後の情報の充実が期待される。自然災害伝承碑に関する情報は、地域の大学や各市町村のデータのほかにも、個人で収集しているデータがインターネットで公開されている例もあるものの、全国で統一的なデータ整理はなされていない。

日本応用地質学会の災害地質研究部会では、全国の自然災害伝承碑のデータを収集する試みを開始したところであり、収集したデータを何らかの形で公開することを模索中である。もし、皆さんが自然災害伝承碑についての情報をお持ちの場合は災害地質研究部会までご一報いただきたい。

引用文献

- 1) 国土地理院：地理院地図，自然災害伝書碑掲載市区町村一覧（2019年10月16日現在）
<https://www.gsi.go.jp/common/000215229.pdf>
- 2) 小山耕平・熊原康博・藤本理志（2017）：広島県内の洪水・土砂災害に関する石碑の特徴と防災上の意義，地理科学，vol.72，no.1，pp. 1-18.
- 3) 徳島県防災・危機管理情報，安心とくしま HP：
<https://anshin.pref.tokushima.jp/docs/2016010800019/>
- 4) 徳島市公式ウェブサイト：
https://www.city.tokushima.tokushima.jp/smph/kankou/shimin_isan/history/018.html
- 5) JAMSTEC，NIED-DIL，高知大学：災害記念碑デジタルアーカイブマップ
https://dil-db.bosai.go.jp/saigai_sekihi/